

## 事業概要書

事業名	SONERS/SURVIVAL SELF RESCUE PROJECT 被災地の子どもたちのサバイバル・セルフレスキュー体験会と地域防災教育 in 大磯ロングビーチ				
開始日	2011年8月27日	終了日	2011年9月26日	日数	31日
団体名	特定非営利活動法人 SONERS (地元協力団体：NPO 法人森は海の恋人)				

総額（税込）	総費用額 7,416,160 円	スタッフ人数	企画運営 5 人 当日スタッフ 12 人
--------	------------------	--------	----------------------

事業目的	<p>東日本大震災の被災地の子どもたちが東海地方の大磯地域において、地元の子どもたちにその全体像を伝えると共に、初歩的な技法を共に体験してもらうことを通して、全国に防災と自助・共助の重要性について啓発することを目的とする。これに加え、被災地の子どもたちが被災地から離れた場所で県外の子どもたちと共に遊べる場を提供することも目的としている。</p>
事業全体の概要	<p>2011年3月11日に発生した東日本大震災においては、多くの人々が地震被害そのものではなく、巨大な津波に巻き込まれて溺死したり、流されている瓦礫にあたりして命を落とした。</p> <p>そうした状況において、今回の津波被害を教訓に、防災という観点からも、今後も発生しうる津波を中心とした水害への対策を長期的に考え実施して行くことが急務の課題であると言える。</p> <p>また、津波に強いまちづくりと共に、災害を免れる能力に長けた個人を育成することも重要な課題であると言える。</p> <p>当会においては、特に沿岸部で暮らす住民が、そうした巨大な津波を中心とした水害に直面した時に、自らの命を守る、あるいは他人を助けることにより、最悪の状況を回避するための総合的なサバイバル技法である、「サバイバル・セルフレスキュー（SSR）」プログラムを開発し、その普及に取り組んでいる。その一環として、8月27日、28日の両日、気仙沼市の唐桑中学校において、着衣泳講習会を実施し、約100名の子どもや一般の方に参加いただいた。</p> <p>今回は大磯ロングビーチにおいて体験会を開催し、参加者の皆様に着衣泳を含む SSR の全体像について把握してもらうと共に、その初歩的な技法を2日間にわたって体験してもらう。</p> <p>開催地は今後発生する可能性のある東海地震などの大震災及び津波に備え、その一部である大磯で実施することにより、全国への実践的な防災訓練の一つとして紹介していくことが出来ることから大磯ロングビーチに決定した。</p>

## 2. 事業の評価（評価者：お茶の水女子大学講師 桑名 恵）

### (a) 妥当性：事業開始当時の状況やニーズに合致していたか、事業実施のタイミングはよかったか

- 被災後半年後という早期に防災及びレクリエーション両方の視点を取り入れた本事業は、防災のイベントとしての先駆けとなった。8月に実施した気仙沼で実施したSSR講習会での教訓を活かしプログラムを強化した上で、被災地外で被災地の子ども達の遊ぶ機会の提供としても配慮されたプログラムとして実施された。
- 防災意識の向上は、東日本大震災支援において重要ではあるものの、生活の立て直し緊急的な支援に着目される中で、被災地の子供たちのイベントを併せた実践的防災プログラムの実施は被災者にも歓迎して受け入れられた。

### (b) 有効性：目標の達成率

- 107名の参加者が、SSRの基本的な技法を身につけた。事業計画で設定された対象人数100名を達成した。
- 大磯という潜在的に水害に直面するリスクを抱える地域で実施したことにより、被災地のみならず実施地での防災としてのSSRの重要性の認識を高めることができた。
- 被災地と実施地の交流の場を持たせることにより、被災地の子どもにとって心理的にリラックスする機会を提供した。
- 被災地と実施地の交流の場を持たせることにより、被災地の子どもにとって心理的にリラックスする機会を提供した。

### (c) 効率性：インプットに対してアウトプットがどれくらいあったか、手法は正しかったか

- イギリス、オランダの技法を取り入れ日本の水害対応に独自に開発したSSRの技法により、水害の際に必要な安全な入水方法、着衣泳、障害物からの回避方法、おぼれている人の安全な救助方法、安全に救助される方法の指導を行い、災害が起こったときの人の行動、役割分担の認識を実践的に伝授することができた。参加者からは「役立った」という感想が多かった。
- 被災者にとって水辺への恐怖心が薄れていない状況で、トレーニングという形で水に入り、イベントとして楽しむことにより、心理ケアにもつながる手法を取り入れた。
- 今後の効率的な成果の達成に向けて、レベルの異なる参加者に効率的に対応するプログラムの開発の必要性が認識された。

- イベント実施までの時間が短かったことで広報に限りがあり、一般の参加者は限定的となった。今後は広報の強化が望まれる。
- 被災地とは離れた場所で実施したことにより、SSRの技法の取得、防災意識の向上のみならず、地元の子ども達との交流などのリクリエーションの場となった。

**(d) 調整の度合：いかに被災地コミュニティとの連携はできていたか、終了時のタイミングや方法はどうか**

- 気仙沼市長の後援の下、地元の信頼が強いNPO「森は海の恋人」との連携により、広報の協力、地元の理解を得て実施に至った。
- 大磯では、SONERS顧問の紹介により、県会議員、市会議員、大磯町長、大磯教育委員長、日本サーファー協会会長等の関わりを得て、神奈川県、大磯町等の防災政策と連携する形で実施された。
- イベントを一過性のものにせず、継続的なSSR技法を通じた防災の啓発活動が必要であり、今後の講習会の実施を模索している。

**(e) 波及効果・インパクト：当初の目的以外に得られた効果、課題**

- SSR技法による本事業をエントリーポイントとして、サーファー協会等を通じたサーファーや修学旅行生への講習の要請があり、より広い防災への取り組みにつながる可能性がある。
- 本事業を通じて、被災地、実施地両方での有力者の協力を得ることで、SSR技法、シビックフォースが推進する防災の認識が高まった。
- 本事業により調達した資機材により、気仙沼地域でのフォローアップの実施、被災地でのより広範な地域での実施の環境が整った。

**(f) 新規性・独自性：新しいアイデアや工夫が取り入れられているか、他被災地のモデルとなり得る事業か**

- 東日本大震災と海洋教育という団体の強みを取り入れ、他の団体、他の既存の技術にはない水害に特化した防災技法としての実践的SSRを開発し、その有用性を示した。被災地のみならず、他地域においても個人レベルの水害対策が重要でありその重要性が東日本大震災で高まっているため、今後のSSR技法のより広範な地域での浸透が期待される。

### 3. 評価者の所感

「一過性のイベントには終わらせない工夫。行政、方針との連携」

SSR 技法による水害にフォーカスした防災の認識は海に囲まれた日本では重要であるため、行政の政策や、他団体との連携、広報の強化により、より広範な地域での実施、実践的でユニークな防災の手法の浸透が期待される。シビックフォースの防災イベントのメニューとしても有用である。